きょういく eye

きょういく アイ

―Information for Boards of Education―

KAIRYUDO

vol.2-01

巻頭言

獣医師の協力で命の教育

～小学校で１年間は動物飼育を体験させて、生命観と思いやりの感性を培う～

全国学校飼育動物研究会　事務局長
全国学校飼育動物獣医師連絡協議会　主宰　中川美穂子（なかがわ みほこ）

車の中に子どもを置き去り熱中症で殺したり、オートバイの座席の中に１歳の子を入れて窒息死させたりと、今、人を含めた「生きものらしさ」を理解していない人たちが多く現れている。そのため、生命観や相手を大事にする感性（愛情・愛着）を培う様々な教育努力がなされている。しかし、命の大切さや「感性」は知的言葉で教えることはできない。感性は特に、幼少期に体験した「楽しい、悲しい、辛い、嬉しい、怖い、がまんした、痛い、心地よい等々」の逸話の蓄積によって形づくられ、これがその子の将来の人間性の土台となる。

子どもの成長には「草や木、花、土、水、風、石、など」の自然体験と「動物」体験が重要と言われているが、特に動物（特にほ乳類と鳥類）は、「優しくすれば懐く」など感情を顕すため、「我と彼」を直接子どもの心に伝えるなど、「相手の感情と身体」を理解させてくれる。しかし現在、この種の動物を飼う子育て家庭は２割になり＊１、「台風一過だね、先生」と言う５歳児が、初めて抱いたウサギのスイッチを探したとか、小学校のウサギを抱いた後、複数の１，２年生が「ウサギは何でできているの？」「どうして動くの？」とおずおずと質問したとか、「ペット動物はマリモ」と答える４年生、「ウサギは卵で産まれる」と言う６年などに仰天することがある。子どもが動物を飼いたがる時期に、「動物らしさ」を体得させなければ、私達は安心して老人になれない。

次期の学習指導要領生活科に動物飼育体験が一層組み込まれ、中学年にも何らかの形で入ると聞くが、子ども達は上記種類の動物と会話しながら、日々健康を気遣って世話をし、やがて愛着ができてこそ、死なれた時の悲しみを感じ、命の尊さを理解できるようになるのであって、人との感情交流が乏しいザリガニなどの飼育では、死生観や思いやりの構築への効果は殆どみられない＊２。幸い日本では伝統的に教育施設にウサギやチャボがいるので、地域の支援で教育に活用したい。平成19年１月の当研究大会で、「地域の獣医師の支援のもと、一年間動物の世話を続けた４年生は、他校の飼育のない４年に比べて、動物への共感度はもちろん、人への優しさ（向社会性）も有意に向上していた」＊３とお茶の水女子大学グループによって報告され、ウサギやチャボの飼育体験が「命の教育・思いやりの教育」などに有用であることが客観的に裏付けられた。平成18年６月時点で、全国市区町村の約６割の地域獣医師会が学校の動物飼育に、何らかの支援をしていた＊４。金銭的な利点を望むなら、動物病院の獣医師は診療室を一歩も出ないが、獣医師も「親」、社会の共通の財産である子どもたちの育ちを願って支援している。

＊1　中川美穂子　2007　家庭での飼育状況（西東京市と小平市の小学４年生）
HP学校飼育動物を考えるページhttp://www.vets.ne.jp/~school/pets/05home-animl.pdf
＊2　中川美穂子 1997教室内動物のこどもへの影響「学校飼育動物のすべて」p.26ファームプレス
＊3　中島等　2007「動物飼育と教育」P.43-46 Vol６　全国学校飼育動物研究会
＊4　中川美穂子　2006　HP学校飼育動物を考えるページ
地域獣医師会と連携する市区町村一覧
http://www.vets.ne.jp/~school/pets/H17rennkeiword.htm

目　次

獣医師の協力で命の教育　中川　美穂子 …… 1
～小学校で１年間は動物飼育を体験させて、生命観と思いやりの感性を培う～
いじめについて　松木　健一 …… 2,3
高校生の友人関係と生活意識　―日本・米国・中国・韓国の4ケ国比較― …… 4

ツールバー Toolbar

高校生の友人関係と生活意識　―日本・米国・中国・韓国の4ケ国比較―

財団法人「日本青少年研究所」は、日本の高校生を対象として友人関係と生活意識について調査している。また、この調査では社会体制や経済状況、文化などの異なる米国、中国、韓国の高校生にも同じ質問をしている。

質問の内容は「進路や希望」「若いうちにやりたいこと」「生活意識や人生目標」「職業選択」など多岐にわたっているが、報告書によると幾つかの質問で日本の高校生と米国、中国、韓国の高校生とは異なる現象が見られる。

①一流大学に進学することとはどういう意味を持っていると思いますか（いくつでも）

	日本	米国	中国	韓国
1. いい仕事につける	48.2	73.3	62.3	54.0
2. 仕事を選ぶ幅が広い	48.5	62.5	49.9	48.6
3. 社会的に「偉い人」になれる	12.5	29.1	37.9	36.1
4. 経済的にいい暮らしができる	28.3	51.5	38.3	35.3
5. 結婚に有利になる	5.9	8.7	14.1	28.9
6. 自分に自信がもてる	35.3	37.7	48.6	47.1
7. 能力のある証明になる	33.5	38.3	41.5	46.1
8. 努力の成果を示す	34.6	45.4	46.6	40.1
9. 周りに尊敬される	19.0	30.5	33.9	30.9
10. あまり意味がない	10.8	4.9	7.2	6.6
無回答	4.1	7.1	0.1	0.4

●①の質問では、日本の高校生は「いい仕事につける」「社会的に偉い人になれる」「経済的にいい暮らしができる」と考える生徒が少ない。

②あなたは偉くなりたいと思いますか（一つだけ）

	日本	米国	中国	韓国
1. 強くそう思う	8.0	22.3	34.4	22.9
2. まあそう思う	36.1	43.8	51.4	49.4
3. あまりそう思わない	42.7	14.6	9.8	25.4
4. 全くそう思わない	10.2	3.5	0.9	2.1
無回答	2.9	15.8	3.4	0.2

●②の質問では、外国の高校生の多くは「偉くなりたい」と考え、日本の高校生は「偉くなりたくない」と思っている。

③多少退屈でも平穏な生涯を送りたい

	日本	米国	中国	韓国
1. とてもそう思う	21.2	9.4	17.2	15.2
2. まあそう思う	40.1	29.0	32.0	35.1
3. あまりそう思わない	29.6	34.1	36.3	37.8
4. 全くそう思わない	8.8	26.7	13.8	11.9
無回答	0.3	0.8	0.7	0.1

●生活意識についても「多少退屈でも平穏な生涯 を送りたい」といい、「暮らしていける収入があればのんびり暮らしていきたい」と思っている高校生は日本に多い。

④暮らしていける収入があればのんびり暮らしていきたい

	日本	米国	中国	韓国
1. とてもそう思う	42.9	13.8	17.8	21.6
2. まあそう思う	37.9	33.0	23.4	40.2
3. あまりそう思わない	14.9	34.7	37.5	27.4
4. 全くそう思わない	4.0	17.7	20.5	10.1
無回答	0.3	0.8	0.7	0.7

（財団法人日本青少年研究所「高校生の友人関係と生活意識―日本・米国・中国・韓国の4ケ国比較」より抜粋）

きょういく eye ―Information for Boards of Education―
Vol.2-01(通巻5号)
定価100円（本体95円）
送料80円
平成19年7月6日印刷　平成19年7月13日発行　編集人　山　岸　忠　雄
発行所／開隆堂出版株式会社　〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
03（5684）6121［営業］, 03（5684）6118［販売］／振替00130-8-75296
印刷所／パシフィック・ウイステリア　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-31-1　ニュービクトリアビル5F

KAIRYUDO
開隆堂出版株式会社
〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1　☎03（5684）6111

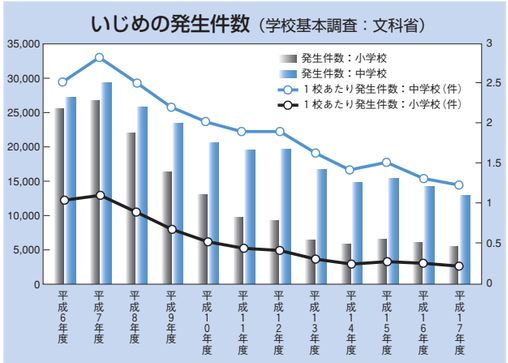
北海道支社　〒060-0061 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 札幌北辰ビル8階　☎011-231-0403
東北支社　〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1萩野町Mビル2階　☎022-782-8511
名古屋支社　〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14-4星ヶ丘プラザビル6階　☎052-789-1741
大阪支社　〒550-0013 大阪市西区新町2-10-16　☎06-6531-5782
九州支社　〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階　☎092-733-0174

いじめについて

松木　健一（福井大学教育地域科学部教授）

1 昭和のいじめと平成のいじめ

私は、教員養成系学部で教育相談の講義を担当している。子どもたちから相談を受けるのが仕事である。平成18年の秋に多発したいじめによる自殺は、あまりに不意で、当惑と自責の念が残るものとなった。文科省の学校基本調査ではないが、私のところでは少しずついじめの相談は減少していた。（学校基本調査では昭和60年以降いじめは減少している。ただし、平成6年以降は調査項目等が異なるので、その前と単純比較はできない。）



いじめは、いじめる人間といじめられる人間の問題ではない。その人たちが属する集団に何らかの圧力や統制が、長期にわたってのしかかってきたときに起きる集団力動の問題である。集団の構成員は、圧力等に抗しきれなくなったとき、圧力等を特定の構成員に向かって吐き出す。また、いじめた人以外の構成員も、攻撃となって吐き出される様を見ることで、ストレスの解消をしている。それがいじめである。

昭和60年代は、受験競争・校内暴力・厳しい校則等、いずれも子ども集団に重圧となる要因が沢山あった。そうでなくとも日本の学校は横並びで、生活全般にまで及ぶ拘束力の強い共同体である。いじめが起きてもおかしくはなかった。

しかし、その後、学校は行かなければならないところ、あるいは、学校で勉強して偉くなることはいいことといった学校神話が徐々に崩壊し、集団自体の凝縮力が弱まってきていた。辛ければ登校しなければよいのである。むしろ不登校といった現象の方が社会問題化していた。さらに、「ゆとり教育」の中で子どもたちの受ける学校での集団ストレスは減少していると、私は思い込んでいた。

昨年表面化したいじめ事件は、私の短慮を曝け出させてしまった。いじめはずっとあるのである。いじめの起きる集団は濃密な凝集性であるがゆえに、いじめの被害者が事件を公表することは、集団からの決裂を覚悟するくらいの勇気が必要である。なかなかできることではない。マスコミ等の報道は、問題の不当性や事の緊急性を誰もが認め易くなる雰囲気をつくりだした。その結果、公表する勇気を与えてくれもし、また悲しい解決への連鎖も引き起こすこととなってしまった。小児科の外来で相談を受けていた私には、学校内の相談と違い、このような勇気を得た子どもや、身体症状を併発するまでになった子どもだけがやってきていたのかもしれない。今回のようないじめ報道がなくても、子どもがいじめを声に出せる恒常的な仕組みの構築を急がねばならない。

● まつき　けんいち●
専門は教師教育。日本赤ちゃん学会常任理事。福井大学では教員養成の一環として不登校やいわゆる軽度発達障害児の支援活動を12年前より教育実習として位置づけ実施している。全ての学生が学校や家庭に出かけ、大学講義でケースカンファレンスに参加し、１年間継続的に子どもたちとかかわる「ライフパートナー活動」の企画運営をしている。
また、県内の臨床活動（病院での心身症児や障害児の教育相談、教師や保護者の相談、授業の臨床研究など）でも活躍中。
著書に「変わろうよ学校」東洋館出版、「気がかりな子どもを抱える教師の気がかり」朱鷺書房など多数あり。

2 関係が疎になればなるほど密になる集団

ところで、学校での外的圧力や拘束力は、昭和60年代よりも明らかに減少していると思われるのに、なぜ、子どもたちはいじめを引き起こしてしまうのであろうか。それは問題が外圧だけではないからだろう。子どもたちの中に生じてきている関係づくりの変化に目を向けなければならないように思われる。現代の子どもたちは、少ない兄弟関係の中で、保護者にしっかり見守られて成長している子が多い。それは、他者に強く働きかけなくとも配慮してもらえる関係であり、また、強引に働きかけられることも少ない関係である。このような関係の中で成長すると、肌と肌、感情と感情が直接ぶつかり合うような関係は恐怖である。子どもは障壁を設け他者の侵入を防御すると同時に、異様とも思えるほど配慮しあう関係を作り出す。対立が顕在化すると、自分は終わりではないかと思えてしまうので、対立の忌避が最優先事項となる。そして、配慮し合えばし合うほど、一日中べたべたと共同生活する時間が長くなる。また離れること自体が不安ともなってくる。こういった共同生活は、極めてストレスの多い状態である。そこに外圧が加われば、いじめは起こるべくして起こるのであろう。

3 教育再生会議からの提言を超えて

平成18年の10月には教育再生会議から「いじめの緊急アピール」が出された。このような教育問題は、すばやく政策や政治に反映できるものではないと思っていた私には、驚きと幾分かの期待を抱かせるものであった。緊急事態であることを多くの人が認識して、「社会総がかり」で自殺の連鎖を食い止めなければならなかったからである。しかし、1ヵ月後に出された「いじめ緊急提言」は、悄然とするものであった。相変わらず緊急対処であった。それも、いじめをする子に対する別室指導や社会奉仕活動への参加、放置・助長する教員の懲戒処分等、直接当事者に対する処分を中心とするものであり、その集団の有様、あるいはその集団が属する学校集団や支えるはずの教員集団の有様、さらには、集団力動を引き起こしてしまうような社会の有様に対する言及がなかったからである。冷静に、学校組織や社会システムにメスを入れなければいじめ問題は解決しまい。与えられた紙面上、全てを言及することはできないが、まずは学校の中からできることを考えてみよう。

① 協働を学ぶ。PISA型学力は、最終的に生涯にわたって学び続け、人生をつくり社会に参加する力を求めている。防御バリアを張って侵入を阻止しつつ配慮する関係から、社会参加しつつ協働しながら創造する活動を、学校の学習活動として位置づけたいものである。協働は、両刃の剣である。関係が密になるだけ、いじめも起きやすい。しかし、協働の仕方自体を学ぶ、個と集団の関係を学ぶ、民主主義を学ぶことから逃走したら、もっと深刻な事態が待っている。

② 教師指導の授業では、子どもの関係（いじめ）が見えてこない。子どものいじめが教師に見えない理由は、指導的な授業だからである。教師と子どものコミュニケーションが中心では、いじめは見えてこない。その結果、教師はいじめを軽く見てしまう。子どもの主体的な学習活動では、子供同士の関係が反映する。教師は、関係づくりと一体となった学習活動をサポートすべきである。

③ 教師の協働を実現する。協働を唱える人間ほど、協働が苦手でもある。大学教員をはじめ、とかく教師は協働が苦手である。いじめ問題を自分だけで解決しようとして、さらに深刻化させてしまう。同僚性の構築、世代サイクルの活性化、どれも教師集団が失ってきたものである。まずは教師集団の抱えるストレスの低減から取り組む。そんな身近なところから体質改善をしていきたいものである。